

立田慶裕先生

—— 好奇心駆動型の教育研究者 ——

松宮 慎治

1. はじめに：サラリーマン化する大学教員

学部を卒業後、神戸学院大学には事務職員として15年間お世話になり、学外も含めて、大学という世界にどっぷり浸かることになった。その過程で、「大学教員がサラリーマン化している」¹⁾ という問題意識をもつようになった。事務をそつなくこなす、メールの返信が早い、会議には定刻に出席する、服装が折り目正しい、上位の職階には従い、立場をわきまえる……などなど。もちろん、いずれも悪いことではないのだろう。「社会人」として学生の見本にもなるのかもしれない。しかしいつのころからか、大学の教育研究者たるもの、本当にそれでよいのかという疑問から逃れられなくなった。社会をリードし、新たな価値観をもたらすどころか、むしろ既存の社会に隷属するような有様にもみえたからだ²⁾。ありのままに言えば、事務職員として組織運営を担うなかで、教員には自主性や自律性を重んじる立場から批判的であってほしい場面でも、逆に官僚的なマネジメントに加担され、がっかりすることもそれなりにあった。

このような問題意識にあてはまらない同僚のひとりが、立田慶裕先生だった。私なりに解釈すれば、立田先生は〈好奇心駆動型の教育研究者〉と形容できる³⁾。以下、思い出の共有を兼ねて、いくつかのエピソードを挙げよう。

2. 思い出

(1) manaba の導入

コロナ禍を経た今でこそ、クラウド型の教育・学習支援サービス（いわゆる Learning Management System : LMS やポートフォリオ）は一般的になっている。そのかなり前、2014年に着任された当時から、LMS やポートフォリオの利活用に取り組まれるという慧眼を立田先生はお持ちだった。きっかけは、当時の教育開発センター（(現) 全学教育推進機構）が創設した教育改革助成金の獲得だった。おそらく、それまでも外部資金の獲得に熱心であられた先生にしてみれば、学内の競争的資金にも、挑戦的な課題で申請することは当然というお考えをお持ちだったのだろう。先生が導入された manaba（株式会社朝日ネットによる）⁴⁾ は、のちに教職課程全体で導入することになった。そのさい、教育改革助成金による実績があったおかげで、「すでに実験的に運用を開始し、効果があがっている」という予算要求を行うことができた。2020年に突然訪れたコロナ禍で、manaba におおいに助けられたことはいうまでもない。

(2) 教員免許状更新講習における「ポケモンGO」の実演

(1)が好例だが、立田先生が新しい情報技術に関心を持ち、導入に積極的であることはわかっていた。さて、スマートフォン向け位置情報ゲームアプリである「ポケモンGO」がリリースされたのは、2016年7月のことである。現在ではプレイヤーの年齢層がかなり上がっている気がするが、リリース当時は10代がほとんどだった。ちょうど一か月後に教員免許状更新講習を控えていたので、私は先生に、「講習中に、ポケモンGOを実演してみませんか」と提案してみることにした。以前から、中等の学校現場で新しいサービスが一方的に忌避されがちである（しかも、教師よりも子どもの方がよく知っているケースが多い）ことに課題を感じていたからである。すると先生は、「せっかく我慢していたのに、また論文が書けなくなってしまう……」と仰りつつも、さっそくアプリケーションをダウンロードされた。講習当日、先生はiPhoneを講義室のプロジェクターにミラーリングし、リアルタイムでポケモンをゲットされた。会場が拍手に沸いたことを覚えている。

(3) 膨大な研究業績の量

立田先生をお迎えするとき、はじめて教育研究業績書を拝見し、その広範な研究関心に驚いた。研究業績の量は、多すぎて先生ご自身も把握しきれていないのではないだろうか。先生とご一緒した期間には、偶然、グローバル・コミュニケーション学部や心理学部の新設、再課程認定といった、法人の経営戦略にとって重要な局面が何度も訪れ、結果として教職課程認定申請の機会が5回もあった⁵⁾。課程認定の教員業績審査はときに厳しいが、どの担当科目・分野でも審査で落ちることはないうえに、別の科目でほかの教員が審査に落ちても、立田先生がいらっしゃるという安心感があった。「国研⁶⁾では、研究業績の評価は昔から当たり前だった」と仰っていたことを思い出す。私など、「量より質が重要」とうそぶいて、研究生産から逃げたくなることもある。量によって質が磨かれる側面があることを認め、見習わなければならない。結果にへこたれず、バッテリーボックスに立ち続けるには、知的な勇敢さが必要であり、誰にでもできることではない。

3. 教育と研究を統合する“余白”の価値

ところで、日本の大学では、教育重点型と研究重点型に、教員の役割をわけるべきではないかという議論が、しばしば生まれる。特に私立大学をめぐっては、研究は教員の趣味に過ぎないので、教育のみしていればよいという言説すら聞くことがある。ところがこれは、アメリカの大学モデルに依拠した考え方である。日本の大学は、教育と研究を統合的に考えるドイツモデル⁷⁾を参照して作られており、教育と研究を区別する歴史を歩んできていない。教育だけ、もしくは研究だけに従事する立田先生など、想像できるだろうか。

教育と研究を統合するモデルのもとでは、教員免許状更新講習でポケモンGOを実演したり、LINEで学生にバイマックス⁸⁾のスタンプを送れたりするくらいの自由や遊び、余白が必要だ。余白が削られれば、やがて好奇心も失われていく。新しい何か創造されるための源泉が、好奇心であるにもかかわらず。

かつて、「先生でもやろう」「先生にしかできない」という消極的な学校の教師を批判し

た「でもしか先生」という言葉があった。「大学教員がサラリーマン化している」という問題意識は、好奇心のような内発的モチベーション由来ではなく、職業選択の結果としてポジションに収まっているという意味で、「でもしか先生」批判と通底する。私がこうあってほしいと考える教育研究者像は、「でもしか」では決してない。たぶん“職業”ですらない。たとえるならその存在は、バンドマンや小説家に似た“生き方”に近い。

ここまで記してから、立田先生らが編著された『勉強せえ！—学びをめぐる12のエッセイ』（日常出版）をひもといてみた。先生とのお付き合いが始まる以前のことは、実はあまり詳しく存じ上げない。せっかくなので昔の著作を拝読したいと思い、今回を機に取り寄せたものだ。すると、立田先生ご自身が執筆された第4章に、奇遇にも次のような、余白の価値への言及をみつけた（立田 2003）。

生まれた時から忙しく、あわただしい毎日を過ごすうちに定年を迎える。自分がいったい何のために生まれてきたかもはっきりわからず、競争社会の中で生きるために一所懸命忙しく働き続け、いつのまにか疲れ果て、死んでいく。そんなウソだろうと思うような人生コースが現代では子ども時代から提供されている。

（執筆者により中略）

要は、あわてず、ゆっくり学ぶこと、である。

時間感覚を磨くためにも、今後の学習をとりあえずの学習から、丁寧（ていねい）な学習へと意識を変えていく。それはまた、とりあえずの人生から、丁寧な人生への変化でもあろう。

最後に、ゆとりをもって空白の時を過ごそう。

（空白の時）

4. おわりに：できるだけ長く、これからも

先の玉稿が編まれてから20年、残念ながら社会のゆとりは回復するどころか、むしろ失われ続けたように思う。もっとも、それらを「どう受け止め、対処するかは、個人的問題である」（立田 2003：71）ことは変わってはいまい。自由意志をもつ個人として、何のために生き、どう学ぶのか。余白の価値から目をそらして、いつの間にか忙しいだけの「とりあえずの人生」を送ってはいないか。長く生涯学習を追究してこられた先生から、改めて問われた気がしてならない。

先生は、今年度でたしかに定年を迎えられるのだろう。だが、“生き方”に定年は存在しない。お体をご自愛いただきながら、どうかできるだけ長い間、立田先生らしい自由な教育研究を続けてください。

◇注

- 1) ここでの「サラリーマン」は、既存の社会や所属組織の価値にのみ忠実な行動を選択する者のアナロジーであり、字義どおりの「サラリーマン」を揶揄する意図はない。また、ジェンダー平等に配慮すれば、「サラリーパーソン」「ビジネスパーソン」などと記すべきかもしれないが、左記をよりの確に表現する用語として、あえて「サラリーマン」を用いている。
- 2) このような問題には、ふだんは気づきにくいのが、危機になってはじめて前景化する性格があるだけに厄介である。同時に、これらは大学の教職員固有の問題というより、結局は現代日本のエスタブリッシュメント全体の問題ではないかということが、東日本大震災をめぐる羽田貴史のエッセイなどを読むとよくわかる。羽田 (2014) としてオープンアクセスなので、ぜひ参照されたい。
- 3) 好奇心駆動型 (curiosity-driven) と対置される態度が使命達成型 (mission-oriented) であるといわれることがある。あるとき、後者の基準で前者が評価される状況が、科学技術・学術審議会の分科会における「人文学分野」で批判的に議論された (科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会人文学及び社会科学の振興に関する委員会 2008)。その意味では、立田先生を「人文学部」にお迎えした事実には、「人文学とは何ぞや」という問いに対する示唆が含まれている気もしている。
- 4) manaba には、優れたユーザ・インターフェイス、開発も含む導入コストの相対的安さなどメリットが多い。なお、神戸学院大学では、現代社会学部でも導入されている。
- 5) 記憶の範囲で、申請機会は次のとおり。グローバル・コミュニケーション学部グローバル・コミュニケーション学科 (英語コース) (中一種免 (英語)、高一種免 (英語)、総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科 (高一種免 (福祉)) 【以上2014年5月】、栄養学部栄養学科 (うち管理栄養学専攻) (栄教一種免) 【2015年3月】、心理学部心理学科 (高一種免 (公民)) 【2017年3月】、現在の心理学研究科をのぞく全学部全研究科 (再課程認定) 【2018年3月】、総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科 (中一種免 (社会)、高一種免 (公民)) 【2020年3月】。
- 6) (現) 国立教育研究政策所。
- 7) このようなモデルは、一般に「フンボルト理念」と呼ばれてきた。「研究を通じての教育」「学ぶ者と教える者の共同体」などの概念の総称とされるが、日本を含めて世界の大学に「フンボルト理念」が伝播したという説自体が「神話」にすぎない (歴史的に証拠づけられていない) とする批判もある (潮木 2008)。なお、アメリカでは、カレッジの教師が当初研究者とみなされておらず、研究や学内行政などの役割が事後に付加されたことにより、「教育型」「研究型」「運営型」「学外活動型」への役割分化や、それによる対立・葛藤が生まれたとされている (潮木 1993)。
- 8) 2014年に公開された、ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオ製作のアニメーション映画。このように、立田先生の関心の広さは、研究にとどまらない。映画やバードウォッチングなど、趣味も多彩でいらっしやるのである。

◇引用文献

- 羽田貴史, 2014, 「私の東日本大震災日誌—京都市・東京都・仙台市・南相馬市・東広島市」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第7号, 217-228.
- 科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会人文学及び社会科学の振興に関する委員会, 2008, 「序「学問」について」文部科学省ウェブサイト. (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/015/siryo/attach/1343350.htm, 2023.11.19.)
- 立田慶裕, 2003, 「時間のセンスを身につけろ—タイム・リテラシー入門」立田慶裕・鍋島祥郎編『勉強せえ!—学びをめぐる12のエッセイ』日常出版, 67-84.
- 潮木守一, 1993, 『アメリカの大学』講談社.
- 潮木守一, 2008, 『フンボルト理念の終焉?—現代大学の新たな次元』東信堂.